

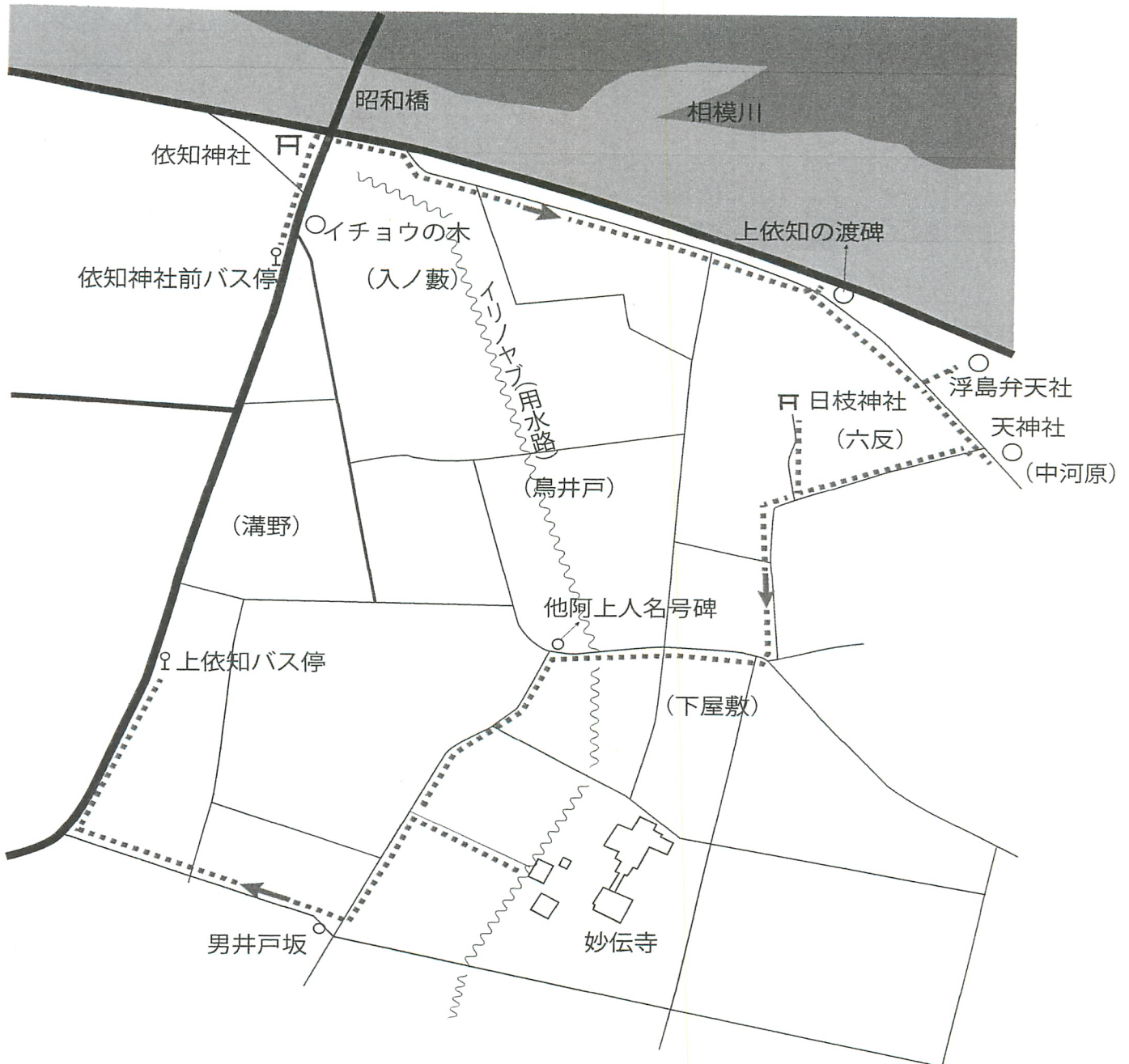
厚木市民文化祭

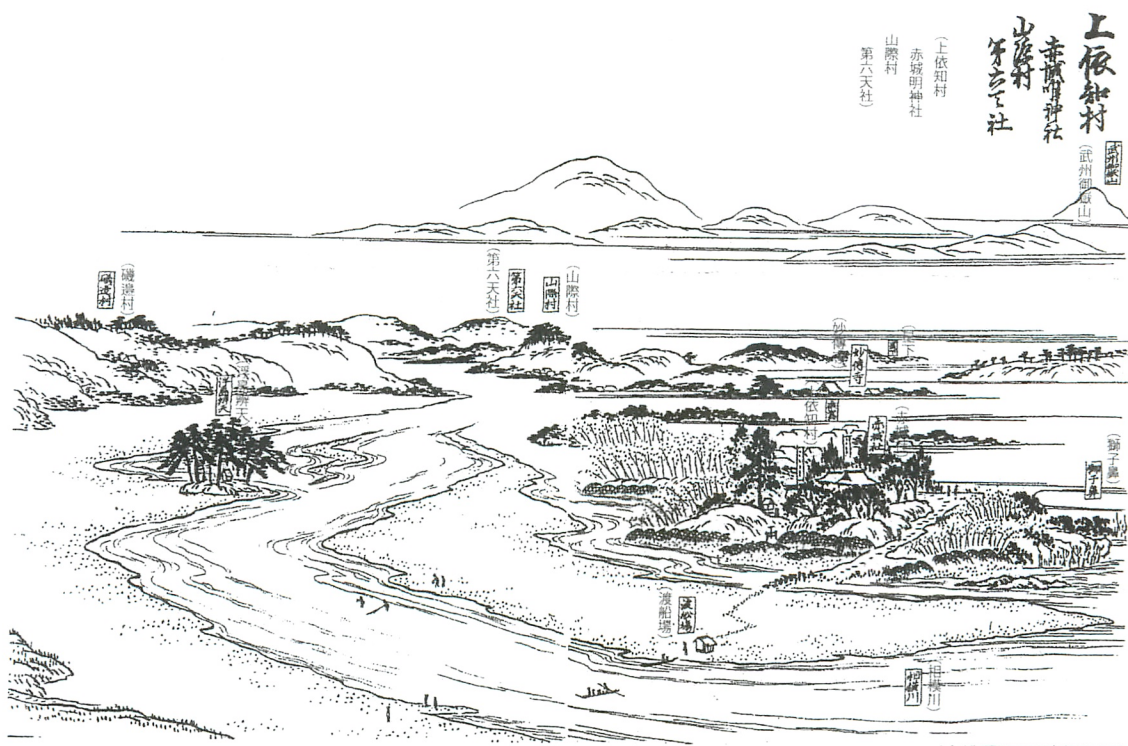
県央史談会 上依知方面史跡めぐり

令和5年 11月3日 (金・祝)



行程：点線





「上依知村 赤城明神社」(『相中留恩記略』)に加筆



八景の棚 (相模原市南区当麻) から上依知方面をみる

上依知村

依知の地名

文永8年(1271)9月13日 日蓮書状

「十三日丑時にかまくらをいで、佐土の国へながされ候が、たうじはほんまのえちと申ところに、えちの六郎左衛門尉殿代官右馬太郎と申者あづかりて候」(『厚木市史 中世資料編』)

永正16年(1519)4月28日 宗瑞伊勢長氏箱根領注文

「はこねりやう所、菊壽丸知行分、

一 十一くわん五百文 ほしのや寺ふん

一 百四十くわん文うのとしの納^ちのかう」(『厚木市史 中世資料編』)

天正 19 年 (1591) 11 月 赤城神社への朱印状写

「寄進 赤城大明神

相州中郡上依知郷内

壺石之事」

(『厚木市史 社寺』近世資料編 (1))

・上中下に分村したのは不明⇒中依知浅間神社銅鐘の追銘(長禄 3 年 <1459>)に「依知郷中村」⇒中依知村?

支配変遷

頼朝→毛利季光→北条氏→本間氏→足利尊氏→基氏→上杉→成氏→上杉顕定→定正→後北条→小宮山・長谷川・大久保
→菰山県→神奈川県→荻野山中藩→荻野山中県→足柄県→神奈川県

規模 家数 147 東西 24 町 (2616 畧) 南北 18 町 (1962 畧) 八王子道係る (『新編相模国風土記稿』)

依知神社

赤城社 村の鎮守なり、神体銅鏡^{面に神体、背に本地大日を鑄}、社領一石 (『新編相模国風土記稿』)

東西十三間 (23.4 m)、南北十六間 (28.8 m)、面積二百七坪 (683㎡)、磐筒男命、九月十九日例祭、往昔依知郷七か村総鎮守が相模川氾濫により社地崩流且つ七か村分郷により衰微、馬場集落は競馬場跡、南二町 (108 m) に大華表の跡の字鳥井戸あり、神木銀杏 (圍二丈 6.06 m) (『皇国地誌残稿』)

懸仏 径 20.4 寸 厚さ 0.3 寸 表外周幅 2.4 寸の覆輪・8 か所の鋳 中央に一鑄の像 (薬師如来?)、
両側に華瓶、天蓋は一部を残存、室町期 (『厚木市史 中世資料編』)

寛保 2 年 (1742) 棟札 奉修復赤城山南泉寺大明神一字成就、相州愛甲郡毛利之庄上依知村
佛像院と記す、按ずるに、南泉寺は当時佛像院の寺号なりしにや、今
は神宮寺と号せり、高座郡磯部村佛像院持 (『新編相模国風土記稿』)

佛像院 磯部村鎮守八幡社別当で磯幡山神宮寺と号す、本山修験小田原玉瀧坊觸下 (『新編相模
国風土記稿』)

※磯部八幡宮本殿 享保 18 年 (1733) 飯山村大工西海新右衛門正重、西海左兵衛重信 (『神
奈川県近世社寺建築調査報告書』)



懸仏



磯部八幡宮



磯部八幡宮境内の木造不動明王坐像 八幡宮別当
仏像院護摩堂に安置されていたという

境内記念碑神社沿革由緒要旨 磐筒男命を祭神、将門が相模川の氾濫により土堤が崩れているのをみて赤城山の馬献上
したところたちまち堅牢な土堤が完成した。これに感謝して村民が将門の霊を相殿にして天慶元年 (937) 社殿を再建
し赤城明神社と称した。頼朝は十万余坪に及ぶ土地を寄進し、頼家は銀杏を寄進した。家康は社領一石を安堵した。明
治維新の際上地となり依知神社と改称した。

境内末社・石碑 ・火防稻荷大明神 (昭和 60 年) ・稻荷社 ・神明社 (文化 10 年 <1813>) ・御嶽社 (旧) ・御嶽社 (昭
和 57 年) 8 月 1 日妙伝寺住職によりおまつり ・狹水神社 9 月 1 日祭礼 ・秋葉大権現 (寛政 4 年 <1792>) ・廿三夜塔 (弘
化 3 年 <1846>)

渋谷増五郎戦死碑 (表) ^{西南}戦死渋谷増五郎戦死碑
之塚

(裏) 相模国愛甲郡上依知村人渋谷定次郎弟渋谷増五郎徴東京鎮台兵明治十年西南之役於肥後国玉名

郡柳川口四月二十四日戦死年二十五

賞勲勞忠義賜金四十五円云

明治廿年二月日 渋谷定次郎 建之
村 内 有 志

・愛甲郡内の戦死者 厚木町 会田平吉 中津村 井上清助 高峰村 成井栄蔵

獅子岩 字八幡ヶ谷戸に奇石あり水を隔て二岩相対す其距離三十間許り一を女獅子岩一を男獅子岩と云（『皇国地誌残稿』）

屏風岩 男獅子岩の反対側にあり村人が爆破したが六反に洪水が起こるようになった（『厚木の地名』）

上依知の渡

渡津 八王子道の係る所相模川に在、対岸高座郡当麻村に通ず、舟二艘を置き、当村にて進退す（『新編相模国風土記稿』）

上依知の渡 東北の方字溝野と高座郡当麻村との境界相模川にあり。平塚より厚木を経て八王子に至る往還に属す私渡なり。渡舟二隻を備う。水幅平水五十間（90 m ）余、深き所一丈（3.03 m ）浅き所二三尺。本村字入の敷なる元標より丑の方（北北東）五町二間（548 m ）を距つ。元標本村中央の稍東方字入ノ敷なる厚木八王子往還の傍二千八百十五番地にあり（『皇国地誌残稿』）

当麻の渡 後北条氏時代から小田原から武蔵の八王子・松山・川越などの支城に通

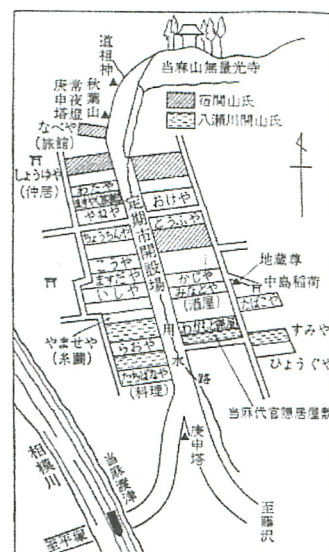
ずる幹線路上の要津であった。

当麻の市 幹線路に沿って中世には賑わいを見せたが、江戸初期寛永12年（1636）ころには衰微した。

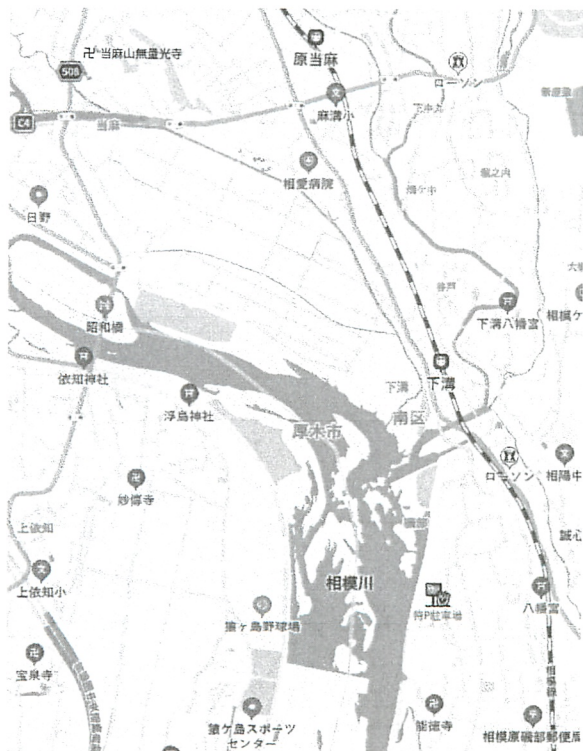
元禄13年（1700）当麻市再興願 当麻村⇒領主阿部飛騨守 これに対して近隣村々16ヶ村も賛意を示し当麻村名主に同意書を提出した。（『相模原市史 第二・三巻』）



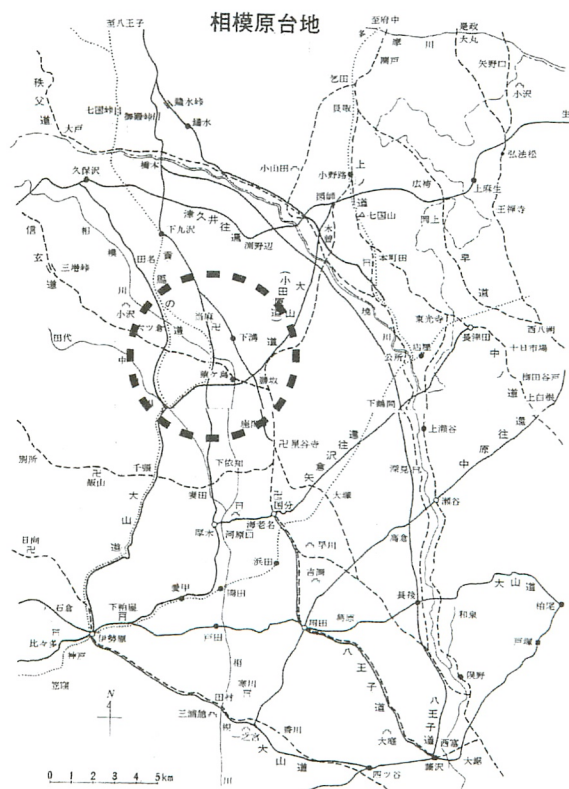
当麻の渡し碑
相模原市南区当麻



当麻宿市場復元図（『神奈川県史』）



現代の道



様々な古道（『かながわの古道』） 円の中心が上依知の渡

浮島弁天

浮島吉備神社 相模川の中央小嶼の上二千七百六十三番地にあり社地東西二十七間（49^ト）南北十間（18^ト）面積二百七十坪（891[㎡]）^{たごりひめのみこと}田心毘賣命、^{いちきしまひめのみこと}市杵島毘賣命、^{たづつひめのみこと}多岐都毘賣命の三神を祀る勧請年暦詳ならず、例祭五月初午日往古依知神社の境内なりしが水災の時此地のみ河中に残る浮島の名是より起ると云此地眺望頗る佳なり（『皇国地誌残稿』）

弁天社 鳥居 文政八年（1825）初夏十五日 願主武州三芳野柏原村（『神社の文化財』）

鳥居 于時文政八酉歳初夏中五日 武陽三芳野柏原邑 願主 長谷川勝蔵源善 武造立之（『神社の文化財』）

4月15日祭礼には幟をたて神主を招いて神事を行い上依知中で祭りを行う。（『厚木の小祠・小堂』）

当麻村 弁天社 享保15年（1730）再建の棟札あり、村内明達院、磯部村佛像院持、社地は相模川の水涯にあり、今当村の持たりといえども此所川瀬しばしば変せるを以て或は対岸上依知村の地に属する事もあり川の沿革により属する所を定むといえり（『新編相模国風土記稿』）

天神社・テンジンサン 現在は祭りは行われないが、昔は1月25日にお神酒・お赤飯をツトッコでおさめた。（『小祠小堂』）

日枝神社・サンノーサン 7月15日中町でまつる。祭礼には妙伝寺の住職に祈祷を行ってもらう。（『小祠小堂』）

他阿上人名号碑（写真左端）

（表）一遍上人五十二代他阿（花押）南無阿弥陀仏

（裏）天保□□

当麻山52代靈隨大和尚 別名南謨（なんぼ）天保6乙未年12月29日寂（71）猿ヶ島の五柏園丈水と深い親交があった。文化7年（1810）丈水三回忌追善句集「遠ほととぎす」を企画した。跋文を草す『野だちの石造物』と当所の説明板には一遍上人三十代とあるが五十二代の誤りであろう。高さ135[㍥]、幅66[㍥]

厚木市内の他阿上人名号碑

- ・寿町長福寺内 文政10年（1827）2月 一遍上人52代
- ・山際長福寺内 文政12年（1829）3月 一遍上人52代
- ・金田建徳寺内 文政13年（1830）一遍上人52代
- ・岡津古久 万延元年（1860）8月 万人講 一遍上人56世主（56世は他阿至実）

徳本 文化14年（1817）11月19日靈隨（52世他阿）の無量光寺に宿泊し翌日国分村（海老名市）、妻田村（厚木市）へ至る。

無量光寺と清浄光寺 二世真教の弟子呑海が正中元年（1324）に遊行分派清浄光寺を開いた。明治17年（1884）の一宗一派管長制度により清浄光寺を総本山、無量光寺は配下大本山となった。



名号碑（左） 地藏（中・右）



徳本念仏碑（妻田西福寺）

妙伝寺

中山法華経寺末、星梅山星降院と号す、俗に星下り寺と称す、相伝ふ寺地もと本間六郎左衛門尉重連の宅地なり、文永八年（1271）九月十三日、重連の弟三郎左衛門直重宗祖日蓮を龍ノ口より当所に伴い来たり重連が邸中観音堂（星降院）に居しむ、注画賛は直重を重連の郎等越智三郎左衛門尉直重とする。その夜日蓮明月に向いて法楽をなせし時、堂前の梅樹に大星下りて化益を助くと、弘安元年（1278）九月僧日源星梅山妙伝寺と称する。一遍当麻村遊化の時日蓮配流を聞、当所観音堂に来て日蓮に謁見し、これより当寺と無量光寺は世々の住持音信を通ず、十月十日日蓮ここを立ちて佐州の配所に赴く。後日遥当寺二十三世となって廃寺たらんを再興開山す（『新編相模国風土記稿』）二十代目より三・四代の間不受不施にて山内大に乱れ檀徒末寺離れ廢地になるところ、寛文五年（1665）二月十二日・十五日兩夜星下りの奇瑞再現し、上へ訴え太守の命により水戸隠井妙徳寺日遥上人再興し、太守の看經仏立像釈迦仏を拝領の上これを丈六釈迦像建立の際に御腹籠とす（『天拝日蓮大菩薩略縁起並勧募帳』）

本尊 木造日蓮上人立像 98[㍥] 木造本間氏夫妻坐像 30[㍥] 木造七面天女坐像 28[㍥] 木造虚空蔵菩薩坐像 42[㍥] 木造日朝上人坐像 27[㍥] 木造鬼子母神立像 115[㍥] 木造清正公坐像 26[㍥] ➡ 厨子 天明年中納之



「天拝日蓮大菩薩略縁起並勧募帳」星降図 寛延元年（1748）31世日義記

絵画 「絹本著色 弁財天十五童子像」(令和5年1月24日厚木市指定有形文化財指定)

開帳

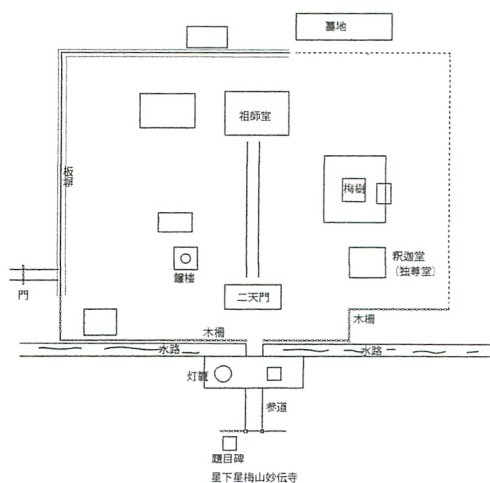
文化十四年 1817 三月十日より、十五日の間、浅草寺観世音開帳、同日より浅草玉泉寺にて、相州□寺天拝祖師開帳

開帳とは、寺社に安置される秘仏を期間を限って公開することで、建物の維持、修復、再建費用捻出のための助成として、寺社奉行所の許可を得て行われるものをいう。

幕府は開帳に一定の基準を設けていて、三三年に一度の割合で許可される順年開帳を基本とし、この他にも將軍、將軍世嗣や輪王寺宮などが参詣した際に許可される御成後（おなりあと）開帳や、災害復興支援などの名目で臨時的に行われる開帳があり、これ以外にも実際にはいろいろと理由をつけて興行の許可を得る場合が少なくなかった。

開帳の主な収益は①賽銭収入、②守札や、寺社の由緒を簡略に記載した摺物である略縁起などの販売、③奉納物、奉納金の三つに大別できる。このうち①および②は参詣者が多いほど多額の収益が見込まれる性格があり、それゆえに興行は集客力のある寺社が選ばれる傾向にあった。そのため、境内や門前が盛り場として賑わう両国の回向院や深川の富岡八幡宮、芝神明宮、湯島天満宮、浅草寺、護国寺、茅場町薬師（智泉院）、蔵前八幡宮（現在の蔵前神社）、市ヶ谷八幡宮（現在の市ヶ谷岡八幡宮）、愛宕権現社（別当円福寺）などは出開帳の受け入れ場所として人気があった。

建造物



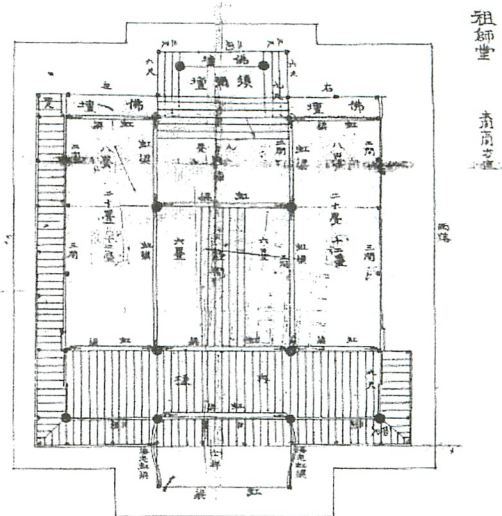
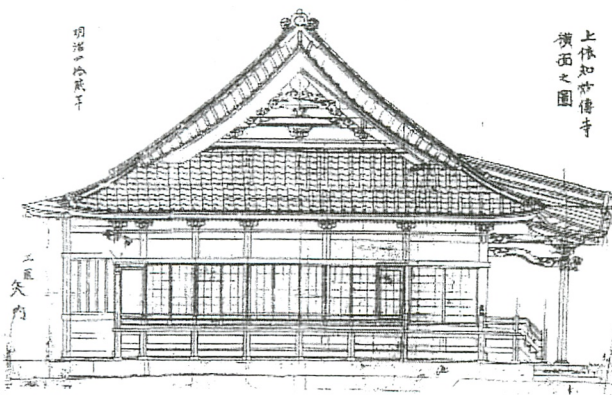
左図の略図

「天拝日蓮大菩薩略縁起並勸募帳」境内図 寛延元年
(1748) 31 世日堯記

本堂 祖師堂

- ・明治42年(1909)建築 矢内右兵衛高光(40年没)➡矢内稻太郎高德(『半原宮大工 矢内匠家 匠歴譜』)
- ・『星野日記』(1993) 明治四十二年四月八日 釈迦誕生日草餅子(だんご)を捧ず 岩・午前十二時より上依知星降妙伝寺新築上棟式に行 寄附一円
- ・扁額「星降殿」堀之内日惣筆 武見日惣。嘉永6年新潟県長岡市生まれ。堀之内妙法寺住持。武見太郎は日惣の甥。大正6年遷化





上依知妙傳寺横面之圖 明治四十二年 工匠 矢内 (『半原宮大工 矢内匠家 匠歴譜』) 祖師堂 本間七間方道 (『半原宮大工 矢内匠家 匠歴譜』)

釈迦堂 (独尊堂)

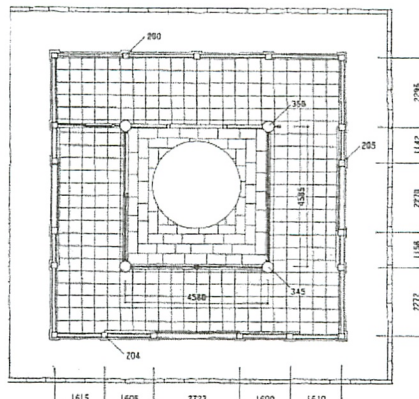
方 15 尺の一間堂、周囲に 7.5 尺幅の裳階をめぐらす。身舎の天井は 27 尺。身舎は径 1.15 尺の 4 本の丸柱、床上 12 尺の柱間に差物を入れてその上に 2 本ずつ大瓶束を立てる。組物は平三斗と出三斗。裳階は全て角柱で絵様肘木をのせる。屋根は入母屋平入。妻飾は虹梁大瓶束笈形付。妻飾は虹梁大瓶束笈形付。

安永 2 年 (1773) 寂の 33 世寂隆院日応代の建築 → 18 世紀半ば

木造釈迦如来立像 丈六仏。与願 (左手)・施無畏 (右手) 印。山門の二天像 (元禄 10 年 <1697> より遡る時期。



釈迦堂 (独尊堂)



独尊堂平面図 (『厚木の社寺建築』)



釈迦如来立像 (『文化財散策ガイドあつぎ』)

水鉢 江都 四ツ谷講中 取次世話人 大久保講中 取次世話人 中野講中 取次世話人 文政十丁亥歳 (1827) 九月 日道代

旧梵鐘

田中大和守藤原重正

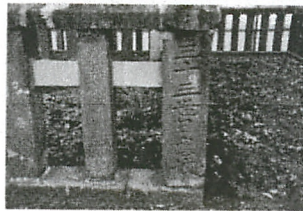
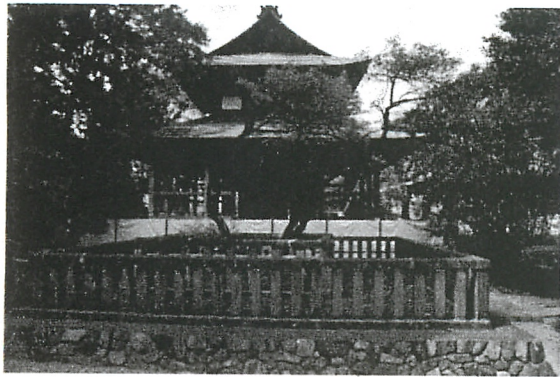
「相模愛甲郡上依知村星梅山妙傳寺鐘 寛文第十 (1670) 庚戌 天九月日 田中大和作 (治工名譜)」 (『日本鑄工史稿 (一)』)

藤原重正は江戸居住の鑄物師



水鉢

霊梅 内側玉垣銘「星下御霊梅」^{たまがき}「石玉牆建立」^{たまがき}「三十三世日應代」^{たまがき}「本間重連屋鋪」^{たまがき}「星梅山妙傳寺」
外側は当村、山際村、三増村、六ッ倉、坂本村、津久井、久保沢、東京、横浜、藤沢など広範囲にわたる



二天門

三間一戸八脚門 入母屋造 頭貫・内法貫・腰貫で緊結、頭貫端の木鼻は隅で絵様木鼻、中央前面で獅子鼻、背面で猿鼻。
柱上の組物は側廻り外周を出組、内周は出三斗。妻飾は虹梁大瓶束。

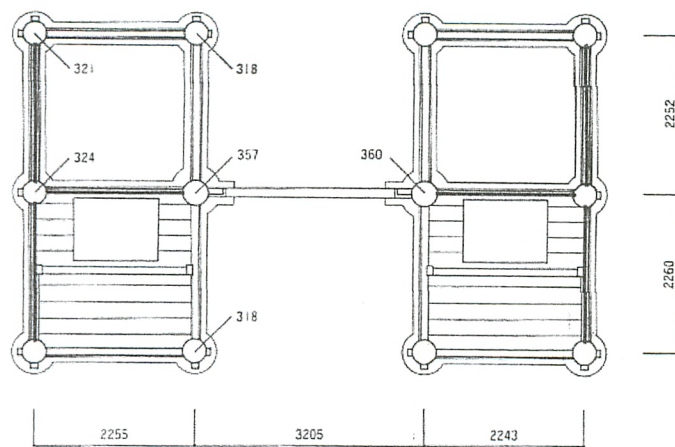
- ・33世日応代延享3年(1746)建築
 - ・扁額「星梅山」33世寂隆院日応(元禄6年1693～安永2年1773)書(宝暦3年<1753>)
 - ・仁王門 二天門ともいう。寺院の守護神である一對の仁王を安置する正門。四天王を配する場合二天門ともよび、持国天と増長天、持国天と多聞天の組合せにする。
 - ・四天王 持国天(東)・増長天(南)・広目天(西)・多聞天(北)、護世四天王ともよばれ、十六善神に数えられる。須弥山中腹を居所とし山頂の帝釈天に仕え仏国土を守護する。多聞天は独尊の場合毘沙門天ともよばれる。
 - ・参道から門に向かって左側が毘沙門天、右側が持国天。
 - ・多聞天「恒に如来の道場を護りて法を聞く故に多聞と名く」(法華義疏)
 - ・毘沙門天は邪鬼を踏む。悪業や煩惱を押さえつけるために踏む。火焰光背は天部・明王のみが背負い煩惱を焼き清めるため。腹部の鬼面は海若とよばれ、のち毘沙門天が踏む邪鬼も耐薫とよんだ。転じて俗に人に逆らう者のことを天邪鬼という。左手に三叉戟、右手を腰にあてる。(『佛教大事典』)
 - ・持国天 右手を腰に、左手に三鈷杵をもつ。
 - ・持国天立像体内木札
- 元禄一〇 竜集 丁丑二月 丈六釈尊之脇士二天造立大持国天開眼供養仏造立一三七〇日遙花押(『寺院の文化財』)



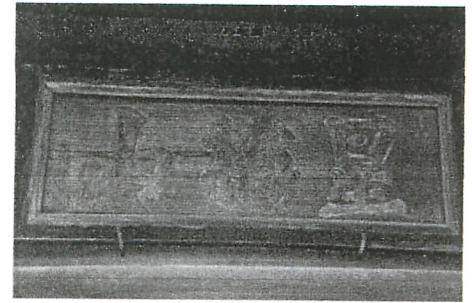
毘沙門天



持国天



二天門平面図（『厚木の社寺建築』）



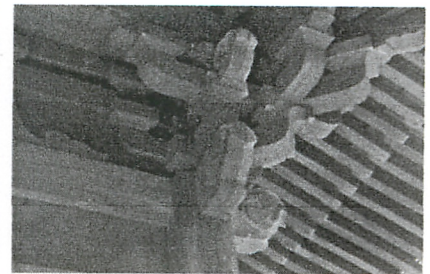
星梅山扁額



表側獅子



裏側猿



隅の収まり

題目碑

南無妙法蓮華經（正面）

「星下星梅山妙傳寺」（正面右）

「財施喜捨面々現安後善

峯亭和參年癸亥 卅八世日伝 四月宗旨発軫日」（正面左）

法界萬靈（台石正面）

現安後善→現世安穩 後生善処 げんぜあんのん ごしょうぜんしょ

四月宗旨発軫日→建長 5 年（1253）4 月 28 日。日蓮は比叡山遊学を終え清澄山（千葉県安房郡天津小湊町→鴨川市 2005）に帰ったこの日旭が森で朝日に向かい、初めて「南無妙法蓮華經」の題目を声高に唱えたと伝えられる。日蓮宗ではこれをもって立教開宗の宣言ととらえる。

38 世は智教院日伝。文化 10 年（1813）2 月 12 日寂

石造門柱（右）「大正四年（1915）十一月十日建之四十八世日深代」「石工玉川村七沢近藤梅吉」（左）「寄付者芳名 他村祖家総代 久保田喜右エ門 久保田市太郎 諏訪部勇次郎 全清吉 又野村 中野村 大井村 串川村 猿ヶ島 当所」・根小屋村の久保田家は万治 2 年（1659）に初代外記が愛甲郡依知村から、相模川の水難を避けるため移住してきたという（『久保田百五十年史』）。

6 代目喜右衛門、安永～天明初生糸売買、7 代目惣右衛門（青山平本家から養子）江戸鉄砲洲本湊町（中央区）に薪炭問屋、八丁堀（中央区）に廻船問屋、小舟町（中央区）に絹織物問屋を開業。天明年間に川和（津久井縣中野村）で考案された川和縞を上野原宿へ出し江戸の白木屋・越後屋などでも扱われ、特に大丸は久保田家を通して売買され、関西でも広く売り出され津久井の名産品となった。高座・愛甲・甲斐東部へも生産を広げ生産量も拡大した。寛政頃にピークを迎えるがその後明治になると自家製生糸の不足に伴う外部仕入品の粗悪品により品質が落ち次第に衰微した。十代目喜右衛門（上記門柱寄付者）没落した川和縞にかわり織物業を活路を見出すべく明治 40 年（1907）合資会社恒産所を興した（設立は分家の久保田市太郎 上記市太郎）。しかし八王子織物同業組合に吸収合併を余儀なくされたが、大正 5 年（1916）に北相織物同業組合を設立し再び発展の機運となった。これを引き継いだのが 11 代目惣右衛門で東京に織物問屋久保田商店を設け八王子、大月に支店を設け津久井織物の発展に貢献した。酒造業を兼営した（現在の久保田酒造）。12 代目は久保田禮治で植物学者で津久井の標本を牧野富太郎へも送り、親交が深かった。戦後は経営者の手腕を発揮し久保田株式会社の隆盛を導いた。禮治の母キクは町田小野路の生まれで（現当主小島政孝氏自由民権資料館運営）、母セキは久保田家から嫁入りした。（『津久井郡勢誌』『津久井町史 通史編近世・近代・現代』）



正面（西側） 題目碑、石造門柱と参道



正面（西側） 題目碑、石造門柱

北側参道の題目碑

「南無妙法蓮華經 星下三十一世」(正面)

「星梅山妙傳寺」(正面向って左)

「愛甲郡上依知村 □ □」(正面向って右)

31 世は「本智院日堯」寛延 2 年 (1749) 5 月 25 日寂



北側 題目碑と参道



北側 題目碑

引用参考文献

- 香取秀真 『日本鑄工史稿 (一)』 甲寅叢書刊行所 1914
- 相模原市市史編さん委員会 『相模原市史』 第一巻 相模原市役所 1964
- 相模原市市史編さん委員会 『相模原市史』 第五巻 相模原市役所 1965
- 相模原市市史編さん委員会 『相模原市史』 第二巻 相模原市役所 1967
- 相模原市市史編さん委員会 『相模原市史』 第六巻 相模原市役所 1968
- 相模原市教育委員会教育局生涯学習部博物館 『津久井町史』 通史編近世・近代・現代 相模原市 2015
- 厚木市史編さん室 『厚木市史』 中世資料編 厚木市 1989
- 厚木市史編さん室 『厚木市史』 中世通史編 厚木市 1999
- 厚木市教育委員会 厚木市文化財調査報告書第 13 集『野だちの石造物』 厚木市教育委員会 1972
- 厚木市文化財調査報告書第 15 集『神社の文化財』 厚木市教育委員会 1974
- 厚木市文化財調査報告書第 16 集『寺院の文化財』 厚木市教育委員会 1974
- 厚木市史編さん室 『厚木市史』 近世資料編 (1) 社寺 厚木市 1986
- 厚木市文化財協会 厚木市文化財調査報告書第 36 集『厚木の地名』 (厚木市における地名調査報告書) 厚木市教育委員会 1996
- 厚木市史編さん委員会 『厚木市史料集』 皇国地誌残稿補遺 (1) 厚木市役所 1982
- 厚木市史編さん室 厚木市史料叢書 2 『厚木の社寺建築』 厚木市 1987
- 斎藤月岑著 金子光晴校訂 『増訂武甲年表 1』 東洋文庫 116 平凡社 1968
- 鈴木茂編 厚木郷土誌文庫五集『厚木の社寺縁起・地蔵めぐり』 県史談会厚木支部 1978
- 鈴木光雄 『幕府作事方柏木、矢内匠家半原宮大工矢内匠家匠歴譜』 神奈川新聞社出版部 2009
- 蘆田伊人編集校訂 圭室文雄補訂 大日本地誌体系④『新編相模国風土記稿』 第三巻 雄山閣 1998
- 神奈川県図書館協会郷土資料編集委員会 『神奈川縣皇国地誌残稿 (下巻)』 神奈川県図書館協会 1964
- 中丸和伯県史シリーズ 14 『神奈川県の歴史』 山川出版社 1974
- 阿部正道 かもめ文庫かながわふるさとシリーズ⑨『かながわの古道』 神奈川合同出版 1981
- 奈良本辰也・高野澄 『忘れられた殉教者』 小学館 1972
- 生涯学習課文化財保護係 『文化財散策ガイドあつぎ』 一ふるさとの歴史をたずねて (改訂版) 厚木市教育委員会 1999
- 羽根田正明 『多摩の古道と伝説』 武蔵野郷土史刊行会 1977
- 座間市立図書館市史編さん係 座間市史料叢書 1 『座間古説』 座間市立図書館 1987
- 日本アート・センター編 『佛教大事典』 小学館 1988
- 国訳秘蔵儀軌編纂局 『新纂佛像図鑑』 国書刊行会 1972
- 長田美川編 『久保町五十年史』 久保田株式会社 1970

(2023.11.3 平本元一)